

本居宣長 モトオリ,ノリナガ 1730~1801

江戸時代中・後期の国学者。号は華風、芝蘭、春庵(舜庵・薨庵)、鈴屋。

宣長は、享保 15(1730)年、木綿商小津定利の長男として、伊勢国松坂に生まれた。父と義兄の死去により 22 歳で家を相続したが、商人に向かぬ資質を見抜いた母の勧めで医師として身を立てるべく京都に遊学、堀景山に漢学を、堀元厚・武川幸順に医学を学んだ。遊学中、先祖の古い姓である本居に姓を復し、宣長と改名した。

宝暦 7(1757)年 28 歳で松坂に帰り、医師を開業する傍ら、国学の研究・教育に従事。宝暦 13(1763)年、賀茂真淵に入門した後は、上代の文献に関心を向け、30 年余りの歳月をかけて『古事記伝』全 44 巻を完成させた。その執筆と平行しながら、文学論や歌論、『てにをは紐鏡』等の国語学の論文ほか、様々な分野で精力的な活動を続け、数多くの著述を残した。享和元(1801)年 3 月、72 歳で没。

Great Books 55 源氏物語玉の小櫛(げんじものがたりたまのおくし)

『源氏物語玉の小櫛』は、本居宣長が 67 歳で完成させた『源氏物語』の注釈書である。宣長は京都遊学を終え松坂に戻った翌年から門人に『源氏物語』の講義をしており、生涯 3 回半の全講を行っているが、本書はその成果の集大成といえる。藤井高尚の序文によると、宣長の講義を受けた石見国浜田藩主松平康定の強い依頼により執筆したとされ、書名は、巻首の「そのかみのこゝろたづねてみだれたるすぢときわくる玉のをぐしぞ」の宣長の歌による。

全 9 巻 9 冊。構成は、1・2 の巻は総論、3 の巻は年立(としだて)論、4 の巻は本文の考案、5 の巻以下は特に契沖の『源註拾遺』を重視した各巻の注釈である。

総論は、宣長が賀茂真淵に入門する以前、34 歳で書いた最初の『源氏物語』評論である『紫文要領』を補訂した内容である。この中で宣長は、物語とはなにか、作者について、制作の由来、物語の名前などについて、前代までの諸説を紹介し、その上で彼自身の考えを記している。中でも「大むね」「なほおほむね」には紙面を費やし、『源氏物語』中の「物語」という語の用例を求め、また巻で光源氏と玉鬘の間で交わされた「物語論」を分析し、物語中における「よきあしき」が仏教や儒教でいう善悪とは異なることを論証。「此物語は、よの中の**物のあはれ**のかぎりを書あつめて、よむ人を、深く感ぜしめむと作れる物」と結論づけた上で、「物のあはれ」に関して詳しく説明を加えた。『源氏物語』の主題を勸善懲悪や好色の戒めとしてきた熊沢蕃山『源氏外伝』や安藤為章『紫家七論』等の立場を否定し、人間の純粋な感動としての「物のあはれ」を本質と説いたこの宣長独自の物語論は、『源氏物語』を中世以来の道徳的文学観から解放した画期的な文学論として高く評価されており、この『源氏物語玉の小櫛』を『源氏物語』研究の流れの、ひとつの節目ととらえる研究者もいる。なお、「物のあはれ」説は、宝暦 13(1763)年に完成した『紫文要領』及び第 2 の歌論書『石上私淑言(いそのかみささめごと)』で既に詳述されており、それらと比較すると『源氏物語玉の小櫛』ではむしろ抑制された記述となっている。

Key Word 物のあはれ

物のあはれをしるといふ事、まづすべてあはれといふはもと、見るものきく物ふるゝ事に、心の感じて出る、歎息の聲にて、今の俗言にも、あゝといひ、はれといふ是也、たとへば月花を見て感じて、あゝ見ごとな花ぢや、はれよい月かななどいふ、あはれといふは、このあゝとはれとの重なりたる物にて、漢文に嗚呼などあるもじを、あゝとよむもこれ也(中略)何事にまれ、感ずべき事にあたりて、感ずべきこゝろをしりて、感ずるを、もののあはれをしるとはいふを、かならず感ずべき事にふれても、心うごかず、感ずることなきを、物のあはれしらずといひ、心なき人とはいふ也、もののわきまへ心ある人は、感ずべきことには、おのづから感ぜではえあらぬわざなるに、さもあらぬは、何ともおもひわくかたなくて、かならず感ずべきこゝろをしらねばぞかし

< 大野晋, 大久保正(編・校訂)『本居宣長全集 4』 筑摩書房 >

(通釈)

物のあわれを知るとは何か。「あはれ」というのはもと、見るもの聞くもの触れることに心の感じて出る嘆息(なげき)の声で、今の世の言葉にも「あゝ」といい「はれ」というのがそれである。たとえば月や花を見て、ああ見事な花だ、はれよい月かなとって感心する。「あはれ」というのは、この「あゝ」と「はれ」の重なったもので、漢文に嗚呼とある文字を「あゝ」と読むのもこれである。(中略)何事にしろ感ずべきことに出会って感ずべき心を知って感ずるのを、「物のあはれを知る」というのであり、当然感ずべきことにふれても心動かず、感ずることのないのを「物のあはれを知らず」といい、また心なき人とは称するのである。さとのいい人なら、感ずべきことには、おのずと感ずずにはいられぬはずなのに、そうでないのは、さとりが鈍くて、当然感じてしかるべき心をもっていないからだ。

< 西郷信綱(訳) 『日本の名著 21 本居宣長』 中央公論社 >

◆ Great Books 文献案内

- 📖 日本古典文学大系 94 近世文学論集 / 中村幸彦(校注)
岩波書店 1976年刊 505p <918/9/94a> 資料番号 12791091
* 『源氏物語玉の小櫛(抄)』
- 📖 日本の名著 21 本居宣長 / 石川淳(編)
中央公論社 1970年刊 494p <081.6/34/21> 資料番号 12785184
* 『源氏物語玉の小櫛(抄)』西郷信綱(訳)
- 📖 本居宣長全集 第4巻 / 大野晋, 大久保正(編集・校訂)
筑摩書房 1969年刊 594p <121.2/28/4> 資料番号 10195725
- 📖 日本哲学思想全書 第13巻 芸術 文学論一般篇 / 三枝博音, 清水幾太郎(編)
平凡社 1956年刊 313p <081.6/10/13> 資料番号 12867255
* 『源氏物語玉の小櫛(抄)』
- 📖 本居宣長全集 7 増補版 / 本居豊穎(校訂)
吉川弘文館 1937年刊 785p <918.5/14/7> 資料番号 12043188

◆ 理解を深めるために 参考文献案内

- 📖 源氏物語 全7巻(講談社学術文庫) 新装版 / 今泉忠義(訳)
講談社 <913.36/270/1~7>
- 📖 小林秀雄全集 第14巻 本居宣長 / 小林秀雄(著)
新潮社 2002年刊 721p <918.68LL/145/14> 資料番号 21482898
- 📖 本居宣長事典 / 本居宣長記念館(編)
東京堂出版 2001年刊 286p <121.52/26> 常置(相談室) 資料番号 21446935
- 📖 新攷源氏物語研究史(源氏物語研究叢書) 増補 / 重松信弘(著)
風間書房 1980年刊 834p <913.36/13A> 資料番号 11981222
- 📖 本居宣長(人物叢書) / 城福勇(著)
吉川弘文館 1980年刊 301p <121.2L/52> 資料番号 10196590
- 📖 源氏物語の探求 第4輯 / 源氏物語探求会(編)
風間書房 1979年刊 399p <913.36/62/4> 資料番号 11981891
* 「本居宣長の源氏物語研究」 / 重松信弘(著)
- 📖 本居宣長全集 全20巻 別巻3 / 大野晋, 大久保正(編集・校訂)
筑摩書房 1968~93年刊 <121.2/28/1~23>